

# 「社会」以前と「社会」以後

## ——明治期日本における「社会」概念と社会的想像の編成

木村直恵

### 序 近代世界における「社会」概念——非西洋世界の後発近代化国家にとって

現代の日本語にとって、「社会」という言葉は元来それが外来語であったことがほとんど意識されなくなっているほどに定着しきっている言葉である。そしてまた、日常的場面から専門的な文脈におけるまで頻繁に用いられているにもかかわらず、この言葉は吟味されることの少ない概念のひとつでもある。たとえば、この言葉がどのようにして日本および日本語に根付き、それはどのような歴史的な意味をもつ出来事であったかについて、十分な検討がなされてきたとはいえないことはしばしば指摘されるとおりである<sup>1</sup>。こうした研究の不足は、「社会」という言葉が他の概念にもまして特有の扱いづらさを帯びていることに起因するのは確かである。この論考では、近世後期における西洋近代の〈society〉概念との出会いから、「社会」という翻訳語が生まれ出る歴史的過程についての考察を試みたいが、そのためにはこの言葉の独特の性質を理解し、また探究のための方法論を考える作業を同時並行で行う必要がある。本論でも、日本語への「社会」概念の導入をめぐる歴史的事実の紹介にとどまらず、この概念を扱うにあたって必要であると想定される方法的視点および問題構成の射程を確認することにも重心を置くこととする。

日本語が〈society〉概念と出会い、最初の翻訳が試みられたのは、近世後期の蘭学においてである。その後、幕末の開国以後、西洋世界を訪問した人々による〈西洋近代社会〉の体験、さらにまた西洋近代の社会科学の学習をつうじて、翻訳と理解の試みは深化することとなった。〈society〉概念は最初から「社会」と訳出されたわけではなかった。そもそも、「社会」は近世までの日本語においてはほとんど使用されていなかった言葉である。当初、この概念の理解と翻訳はさまざまな試行錯誤のなかで進められ、幕末から明治初期にかけて、個性あるさまざまな翻訳語が編み出されることとなった。そして1875（明治8）年に至り、「社会」という翻訳語が新聞紙上で用いられて以後、この言葉は急速に普及し、数年のあいだで競合する翻訳語はほぼ消滅するとともに、「社会」という言葉が定着することになったのである。この過程には、西洋体験・西洋思想のインパクト、近世儒教の素養と漢語使用の伝統、蘭学から洋学への展開、近代化にともなう新たな政治的・「社会」の人間関係様式の創出、さらに「社会」という言葉が流通する言説領域の制

1 市村弘正・杉田敦『社会の喪失』中央公論新社、2005年、221頁。

度的・思想的生成といったさまざまなファクターが絡みあっていた。

ところで先にも述べたとおり、従来、この過程を当時の歴史的・思想的・文化的コンテクストのなかで意味づける試みは十分になされてきたとは言いがたい。しかしながら言葉が意味を獲得するのは常にコンテクストのうちにおいてであることをふまえるならば、「社会」という翻訳語とその意味の編成を捉えるうえでも、それをコンテクストのうちで、コンテクストとともに捉えることは不可欠の手続きであろう。この際、そのコンテクストをどれほどの拡がりにおいて捉えるべきかが、ひとつの重要な問題となるだろう。

「社会」という言葉－概念は、近代世界を生きるわれわれにとって、その言語や国籍を問わず不可欠のもの、普遍的なものと感じられている。だがそもそも〈society〉概念はヨーロッパ世界において生まれ、ヨーロッパ世界において歴史的現象としての〈近代〉が展開するとともに、〈近代〉にとって不可欠の概念のひとつとしての位置を占めることになったものである。〈society〉概念はその後、〈近代〉の世界的拡散にともなって非ヨーロッパ世界のローカルな言語へと拡散していった。ローカルな言語におけるこの言葉の翻訳＝獲得は、ある意味で、その地域における近代化の進展の指標をなすものとなった。そのことは言い換えると、東アジア地域を含む非ヨーロッパ世界にとって、〈society〉概念は近代化の過程で必ず輸入・翻訳されるものとして経験されたということを意味しているのである。

こうした概念の輸入・翻訳の過程において、少なからぬ意味上の変容が生ずることは言うまでもないことだが、それと同時に着目する必要があるのは、意味を与え、生み出す条件や構造のレベルにおいてもたえず発生している差異である。当たり前のことではあるが、非ヨーロッパ世界における〈society〉概念の編成は、西洋の社会思想史のなかでそれが説明されるのとはまた別の軌跡を描いている。それらに対応する歴史的な現実を異にしており、また概念は固有のコンテクストを生み出しさえするからである。それゆえ日本語に限らず、〈society〉概念をそれぞれの言語的－文化的コンテクストにおいて探究する際には、たとえば西洋社会思想史が説明するような西洋近代におけるコンテクストにたいして、ある程度意識的に方法的忘却の態度をとる必要があるといえる。

そのためにわれわれがとるべき方法的視点のために、ここでは簡単に想像力と経験というキーワードを提示しておきたい。〈society〉という概念は、この概念をいまだ知らない人々にとって決して理解しやすい概念ではない。それは学術的・観念的学習をつうじてのみ理解されるわけではない。われわれはこの概念が人々の想像力へのチャレンジとして現れるさまざまな局面を捉えるべきであり、そこで想像力がどのような思いがけないかたちをとるかを観察する必要があるのではないだろうか。また、〈society〉概念との出会いは驚きや戸惑いをはじめとするさまざまな反応や経験を生み出すことになった。そのうえでこの概念に独創的な意味づけをし、新たな用い方を編み出し、何らかのかたちで実体化し、それに関わってゆくというさまざまな経験が生み出されるのである。そのような、概念の生きられ方と、それが生きられる場という問題が、非西洋世界にとってこの概念の意味を

探究する際の鍵となってくるであろう。

想像力と経験という観点に重心を置いて、〈society〉概念との出会いから「社会」という言葉の生成まで——すなわち近世後期から明治前半期に至る歴史的時間の探究のために、次のような三部構成で考察を進めることとしよう。

- 1 「社会」以前のこと：「社会」概念の不在状況についての検討と、「社会」という訳語の登場以前のさまざまな翻訳の試みとそこに現れた構想
- 2 「社会」が生まれる：「社会」という訳語の生成の現場と、そこで「社会」に与えられた意味
- 3 「社会」以後：「社会」という言葉の定着・拡散とそれがもたらした歴史的インパクト

ここで取り上げた時期は、近代の「社会」の歴史全体にとっては、発端にすぎない部分に限定されている。だが「社会」という概念の歴史的探究においては、「社会」という訳語が成立する以前、すなわちプレ「社会」段階にあえて比重を置く必要があると感じる。これは、「社会」という言葉に特有の、扱いづらい性質に関わる問題である。

概念をめぐる歴史的考察につきまとう困難の最たるものは、ある概念を獲得することによってわれわれにはその概念の指示するものが自明化された実体と感じられるようになり、その概念を用いずに思考することが不可能となるということ、そしてこの概念が存在しないことはどういうことかを想像できなくなるという点にある。「社会」について言えば、この概念の獲得は明らかに、既存の語彙に新しく語彙がひとつ追加されたにとどまらない出来事としての意味をもつ。それは社会的自意識とでもいえるものを立ち上げることになり、いったんそのような自意識を獲得してしまうと、人はもはやその自意識の外部に立つことはできなくなる。しかしながら、「社会」概念の探究においてわれわれが試みるべきことは、すでに出来上がった社会的自意識の内部にとどまりながら、〈society〉概念の翻訳の経緯と「社会」の用例を実証的に調査することではなく、自意識の外部に出る視点を確保し、認識論的転換のさなかにおいて何が起こったのか、何が経験されたのかを明らかにすることであろう。この作業を経ずして、近代の100年以上にわたるこの言葉の歴史を正当に扱うことは不可能である。

## 1 「社会」以前のこと

### 1-1 〈society〉と出会う

近代以前の日本語には、現在の日本語がもっているような「社会」という語彙は存在していない。この、「社会」概念がないという状況を想像することはきわめて難しい。事実、われわれはあまりにも近代以前の歴史的時間に「社会」という語を適用することに馴染んでしまっている。人類の生存のための共同生活を指して、ある程度の政治共同体の編成を

指して、あるいは市場経済の成立を指して、われわれはそこに「社会」の成立や存在を見る。だが、ここではこうした観点からは距離をとって考えることとしよう。ここでは概念の不在<sup>1</sup>ということ、ひとつの厳密な歴史的事実として捉えることとする。

われわれがこの概念の不在状況の質をいくらかでも想像しようとするとき、手がかりとなるのは次の事実であろう。すなわち、最初の蘭仏辞書の和訳事業のなかでこの概念がオランダ語から日本語に翻訳された1770年代から、「社会」という言葉が定訳となる1870年代に至る約100年のあいだ、長い試行錯誤が続いたこと。またその間、後世の研究でしばしば対応させられる「世間」という言葉を〈society〉概念と結びつける発想が存在しなかったことである。

〈society〉概念と日本語の最初の出会いは、蘭学に始まるヨーロッパ近代語の学習と辞書翻訳の過程においてであった。近世後期から幕末にかけての蘭学・洋学の主流で学ばれていたのは自然科学的な分野であったため、文献のなかで具体的な用例として〈society〉概念が出てくることはほとんどなかった。辞書のなかの孤立した一単語として——コンテキストから切断された状態で、人々はこの概念と出会うことになったのである。初めて蘭仏辞書が和訳された1770年代から1870年代に至る100年のあいだ、オランダ語・フランス語・英語からの翻訳辞書のなかで〈society〉概念に対応させられた訳語群は、「交る、集る、朋友、会衆、侶伴、ソウバン（相伴）、交り、一致、寄合、集会、仲間、つき合、組合、懇……」<sup>2</sup>といったものである。これらは現在、「社会」という言葉から一般的に思い描かれるものとはずいぶん異なった語彙であり、全体的に抽象度の低い、具体的・直接的な人間関係を想起させる言葉である点が特徴的である。見てのとおり、ここには「世間」「世の中」に類する在来の語彙は一切含まれていない。〈society〉概念と「社会」概念と「世間」概念とは、元来、一直線に接続されるものではなかったということは、いくら強調してもしすぎることはない。これらの結びつきは、「社会」という言葉の成立ののちに後付けで見出された連関なのである。

他方、ヨーロッパにおいてもこの時期、〈society〉概念は静的な確立された意味とともにあったわけではない。よく知られているように18-19世紀にかけての時期は、西洋言語においても〈society〉概念の意味が、具体的・直接的な人間関係を指す意味から抽象性・一般性の高い意味へと大きく重心移動していく変動期にあたる。蘭学者・洋学者たちが翻訳したのもこうした過渡期の辞書であった。ただし日本における翻訳はこうした変動に連動した形跡はなく、この間一貫して前者の意味にとどまりつづけていたのである。興味深いのは、直接の西洋体験をもたないまま〈society〉という未知の概念を捉えようとした当時の人々の想像力は、近世日本に固有の人間関係・社交に関わる語彙によって意味を捉える傾向があったという点である。未知の文化を理解しようとする際に、既知の文化的経

2 稲村三伯『波留麻和解』1796年、藤林普山『訳鍵』1810年、本木正栄『<sup>あんげりあ</sup>諸厄利亞語林大成』1814年、桂川甫周『和蘭字彙』1855-58年、堀達之助等編『英和对訳袖珍辞書』1862年、村上英俊『仏語明要』1864年から。

験へと変換し、在来の文化的コンテクストへと嵌め込もうとする操作が行われた痕跡がここにはっきりと表れている。しかしながら〈society〉概念はこうした既存の文化的認識枠組みへの引き付けによって理解できる概念ではなかった。この概念の理解と翻訳は、彼我の言語的-文化的表象体系の差異に向き合うことによってはじめて深められることになる。

## 1-2 〈society〉を想像する——「相生養之道」と「人間交際<sup>じんかん</sup>の道」

〈society〉は深く近代ヨーロッパの歴史に根差した独特の概念である。それゆえ非ヨーロッパ世界に属する日本にとって〈society〉という概念を知るということ、そしてこの概念を自らの言語的-文化的表象体系のうちに組み込むということは、すでに述べたように、たんに既存の語彙に一単語を付け加えるにはとどまらない出来事だった。〈society〉概念の理解は、単語としてのこの概念の意味を把握することによってではなく、この概念を生み出した言語的-文化的表象の構造の異質さを認識したうえで、他者の文化をある程度以上体系的に理解しようとする試みのなかで進められていく。われわれもまた、異質な文化との出会いと差異の認識、そしてそれを理解しようとする試みというコンテクストの次元から、この概念の翻訳と理解を捉える必要がある。そのためには「社会」という翻訳語が定まる以前の状況、すなわちこの概念がまったく未知のものであった段階から、それを想像し捉えようとする試行錯誤段階の試みにじゅうぶん焦点をあてなければならない。「社会」という翻訳語に一元化される以前の翻訳と理解の試みのうちから、現在では忘れ去られた〈society〉をめぐる諸構想を取り出してみることにしよう。これらも視野に入れてはじめて、われわれは〈society〉概念を翻訳し理解するという行為が、日本の近代にとってどのような出来事であったかを、より十全なかたちで理解できるようになるのである。

〈society〉概念についての理解は、幕末以降、実際に日本人が西洋の地を踏む体験が可能になったとき、次の段階に進むことになった。この時期から蘭学・洋学者のうちでも西洋近代の政治思想や社会科学に興味をもつ人々や、政治家としての実務経験をもつ人々が西洋諸国を訪れはじめる。このとき〈society〉は、辞書の一項目としてではなく、西洋における生きた実体として体験されることとなった。彼らは深い衝撃をもって〈society〉を観察・体験し、あるいは〈society〉というものにたいする無知を悟り、ここであらためて〈society〉が、既存の日本語-漢語で置き換えるだけではまったく不十分な、ほとんど翻訳不可能な概念であることに思い至るのである。

彼らに衝撃を与えた西洋での社会的体験の最たるものは、西洋においてはインフラ整備、政治、経済から医療・福祉や学術に至るまでの幅広い領域にわたって、多様な団体-結社、すなわちアソシエーションが公的な活動力を担っているという事実であった。近世の日本においても、社交や学術などを目的とする人々のあいだの結びつきは活発に展開されてい



たが、高札場に掲げられた徒党禁令<sup>3</sup>が示していたとおり、人々の結合が公的な活動力になることは厳しく禁じられていた。それにたいして彼らの眼には、欧米諸国ではあらゆる部門において民間のアソシエーションが重要な担い手となっていると見えた。その認識は、幕末・維新期の日本人に三、四十年先立ってアメリカを訪れたトクヴィルの観察と驚嘆とちょうど重なり合う<sup>4</sup>。

幕末に欧米諸国を訪れた福沢諭吉は、こうした人的結合のことを「社中・会社」といった言葉で指し、いかに多くの「社中・会社」が設立され、多岐にわたる活動を展開しているかを事細かに記述した<sup>5</sup>。明治維新後に欧米諸国を歴訪した岩倉遣外使節団もまた、「欧州の政治を総べて、之を論ずるに、全く東洋の政治と別種なり、欧州人の性稟には、尽く会社団結の気風を具有す、是全く東洋人種になき所たり、故に欧州の政俗は、細に分析するに、大は一国の政体より、州と分れ、県と分れ、郡と分れて、小は村邑の分割に帰するまで、尽く会社の性質にて結晶す<sup>6</sup>」という報告を残している。彼らもまた、「会社の性質」「会社の連結」が「欧州人徹頭徹底の風気」であることを感じとっていた。彼らはこのようなアソシエーション実践の充満・貫徹というかたちで、西洋の〈society〉を体感したのである。

このようなかたちで〈society〉を把握したとき、彼らはこの言葉に相当する日本語－漢語がまったく存在せず、翻訳がきわめて困難であるという認識にぶちあたることとなった。度重なる西洋体験ののち、西洋の生み出した〈近代〉の根幹にあたる原理を紹介するために、福沢諭吉はイギリスで出版された初学者向けの政治経済学教科書 *Political Economy, for Use in Schools, and for Private Instruction* (William and Robert Chambers, London and Edinburgh, 1852) を部分的に翻訳し、『西洋事情』外編として出版した(1868年)。しかしながら、原書と『西洋事情』外編とを対照させてみるならば、福沢が〈society〉という語の訳出にどれほど苦勞したかは一目瞭然である。福沢は〈近代〉についての日本における最初の体系的理解者であり、優れた紹介者であったが、その福沢にして〈society〉概念の訳出不能という出発点があったことは留意されてよい。

岩倉使節団については、書記官として使節団に随行していた久米邦武が、外遊中にアメリカ合衆国憲法の解説書を翻訳しようとしたときのエピソードを次のように伝えている。

此の時、困ったのは訳語で、例えば憲法の初に「政府の用はジャスティースとソサイティーとにあり」との原語に漢字を充てると義と仁の二字で尽すが、余り簡単である

3 「何事によらず、よろしからざる事に百姓大勢申合せ候をととうとなへ、ととうして、しみてねかい事くハたつるをこうそといひ、あるひハ申あハせ、村方たちのき候をてうさんと申、前々より御法度に候条、右類の儀これあらは、居むら他村にかきらす、早々其筋の役所え申出へし」1770(明和7)年の徒党禁令より。

4 たとえばトクヴィル、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』第2巻上、岩波書店、2008年、第二部第五章ほか。

5 滞欧中のメモは、帰国後、福沢諭吉『西洋事情』初編(1866年刊)に結実した。

6 久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』岩波書店、1982年、第5編、158-59頁。

為ジャスティースは正義、ソサイティーは会社とか社会とか社交と色々訳語を探し、森有礼は「仮名でソサイティーとすればよい」と主張したが、夫では翻訳にならぬとの非難が起り、苦心惨憺した。<sup>7</sup>

〈society〉概念に在来の日本語－漢語表現を対応させるのではなく、その思想的意味を読みこんだ新たな翻訳語が提案されはじめるのは、こうした戸惑いのなかでのことであった。とりわけ注目に値するのは、幕末にオランダに留学した西周と津田真道が用いはじめた「相生養之道」と、福沢が考案した「人間交際（の道）」<sup>じんかん</sup>である。これらはいずれも現在では完全に忘れ去られた翻訳語である。しかしながらこれらの翻訳語は、儒学的教養を基礎としつつ近代ヨーロッパの政治・社会思想を本格的に学んだ最初の知性が、自らの言語で〈society〉概念を説明することを試みた成果として、重要な思想的意義をもっているとともに、現在のわれわれにとっても〈society〉概念にたいするオルタナティブな理解の可能性を感じさせてくれるという点で興味深い。

福沢や西らにとって、〈society〉概念を理解することは、この言葉を中心概念のひとつとして組み込んだ近代ヨーロッパの知——政治思想・社会思想の発想・認識の様式を理解することと不可分であった。当然ながらそれは、彼らが親しんできた儒学の発想・認識様式とは大きく隔たっていた。他方で西洋近代の市民社会の基盤となっている資本主義的経済活動もまた、幕末維新期の日本においてはリアリティを欠いていた。こうしたなかで〈society〉とは何かを想像する試みは、西洋における認識とはズレを孕んで、独特の個性あるイメージを生み出すこととなった。その特徴のひとつとして、「相生養之道」も「人間交際（の道）」<sup>じんかん</sup>も、「道」という言葉をともなって発想されたことが示しているように、〈society〉は儒学的な理想に代わり、新たに追求され達成されるべき倫理的な規範の含意をもつものと受け止められることになった。西周は次のような定義を示している。

Society 即ち相生養之道と訳。此のソサイチなる語は社の字なりと雖も、党の字に当るを好しとす。凡そ人の生るや必ず一己に生養すること能わず。禽獸如きは一己々に生養なすものと雖も、人たるものはしからず。かならず人民相與になさざれば生養すること能わざるものなり。故に是非相互に助けを以て生活するを相生養の道と云う。ソサイチ即ち党というのは人民未だ国をなさざる以前にて、郷党の生という義なり。

相生養の道となすは division of labour or profession, 労を分ち業を分つという義にして、人民一己々に孤立し生養すること能わず、故に或いは耕し、或いは織り、或いは器物を制する等の如く、必ず其業を分かち労を分つて務めざるべからざるものとす。而して相互に其物を交換し、相用いて始めて生養の道立つなり。

又必ずしも労を分たざるべからず。若し一人にても労を務めずして他人の勞せしものをを用うるが如きは、之を天道に於いて賊となす。上天子より下万民に至るまで各々

7 久米邦武、中野礼次郎他編『久米博士九十年回顧録』下巻、早稲田大学出版部、1934年、256頁。

業に貴賤ありと雖も、悉く勞を分つて務めざるはなきところなり。而して初めて国家たるもの立つなり。士農工商の如きは勿論、其の他各々其業をなすものは悉くソサイチーの中にありて、なお時計の組立の如く一点の塵の如きは害なしと雖も、車齒の一つを欠くときは其用をなすこと能わざるが如し。人民各業を勞を分つて相與に務めざるべからざるものとす。孟子に易功通事と云うも即ち此意なり。<sup>8</sup> (傍点引用者)

ここでは〈society〉は、社会分業のイメージと孟子の言葉の引用によって説明されている。人間は孤立して生きることはできず、共同的な生がその本性として定められているという発想が、儒学的伝統と西洋近代政治思想の伝統を架橋することとなった。引用からもわかるとおり、「相生養之道」は互いに異なりあう人々が、それぞれかけがえのない存在価値をもち、相互に支え合う理想社会のイメージを示している。社会分業という発想自体は、儒教にも日本の近世思想にも見られるもので、この表現は直接的には荻生徂徠の言葉に由来すると考えられる<sup>9</sup>が、それにもかかわらず、西は「相生養之道」を「漢儒に於て此の如き道ある未だ曾て説かざる」<sup>10</sup>ものだとして捉えていた。西はこのとき、聖人としての超越的な君主が統治する儒教的な国家像ではなく、「天子」もまたひとつの部品のように組み込まれ、それぞれが対等でありながら異なりあう役割を相互にかけがえのないかたちで果たし、円満な調和を描く共同的な生のありようとして「相生養之道」を構想していたからである。

一方、福沢諭吉はすでに『西洋事情』外編において、〈society〉概念に「人間交際の道」をはじめとするいくつかの訳語を与えてはいたが、その訳し方はきわめて不安定かつ不十分なものであった。福沢が「人間交際」という翻訳語にあらためて新たな息を吹き込むのは、『学問のすゝめ』を書いていた1874(明治7)年頃のことである。福沢もまた「人の性は群居を好み決して独立独歩するを得ず」<sup>11</sup>という前提から出発するが、続けてこのように記している。「夫婦親子にては未だ此性情を満足せしむるに足らず、必ずしも広く他人に交り、其交際愈広ければ一身の幸福愈大なるを覚るものにて、即ち是人間交際の起る由縁なり」。福沢は「人間交際」を、家族や血縁の間柄を超えて、広く他人と交わることと捉え、さらにそうした「人間交際」がますます多彩に活発に複雑に展開していくさまを「文明」の進展だと考えたのである。<sup>12</sup>

このような「人間交際」を構想するにあたって、福沢が重視したのは人と人のあいだの

8 「百学連環」大久保利謙編『西周全集』第4巻、宗高書房、1981年、239-40頁。1870年から翌年にかけて行われた講義である。ちなみに西がこの概念を紹介したのは、経済学の項目と倫理学の項目においてであった。

9 西周は若い頃、荻生徂徠にかなり傾倒していたが、徂徠のテキストには「親愛生養の性」「相親しみ相愛し相生じ相輔け相養い相匡し相救う」(『弁道』七)など、「相生養之道」と類似した表現が重要なコンセプトとして繰り返し用いられている。

10 『西周全集』第4巻、161-62頁。

11 『学問のすゝめ』九編、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第3巻、岩波書店、1959年、87頁。

12 『文明論之概略』巻の一、第二章。



差異であった。「人間交際」における人々のあいだの関係を親子の間柄の如きものと想定してしまうなら、交際は必ずや画一化の強制に終わってしまうだろう。「一国と云い一村と云い、政府と云い会社と云い、都て人間の交際と名るものは皆大人と大人との仲間なり、他人と他人との附合なり」<sup>13</sup>。福沢はこのように述べて、「人間交際」を、人々が画一的にまとめあげられているさまを指すのではなく、大人同士・他人同士としてお互いの差異を承認しあい、差異を前提として人々が関係しあう状態／場として描き出した。こうした人間関係の構想は、〈society〉概念を近世日本の人間関係様式に対応する語彙で捉えていた段階とは大きく異なるものであった。

「相生養之道」も「人間交際（の道）」も、際立っているのは価値中立的な抽象性ではなく、人間同士の具体的な相互関係のありように根差した構想力の高さという点である。こうした発想の背景にあったのは、近世的な人間関係様式にたいする批判的な意識だった。近世的・儒教的な人間関係モデルにおいては、人間の不平等・権力の非対称と、画一性・同質性という二つの契機が結びついて統治および社会構成の原理を形づくっていたのになんて、近代ヨーロッパにおいては対等にして差異あるものの結合が統治および社会構成の原理となっている、と彼らは把握した。〈society〉とはまさに、対等にして差異あるものの結びつきの姿だったのである。

実のところ同時代の西洋世界においては、〈society〉はむしろ個々人にたいしては画一化・均質化の力を揮うものという否定的な認識が発生しており、それは現代まで受け継がれる重要な社会認識の類型となっている<sup>14</sup>。〈society〉を人間の複数性と差異を前提した関係性として捉える 19 世紀後半の日本で生まれた見方は、同時代の西洋世界における理解とは食い違い、正反対の可能性を描いているように見える。今現在、われわれが日本語の「社会」という言葉の可能性をあらためて模索しようとするならば、かつて〈society〉概念をこのように理解しようとした試みがあったことは想起される価値があるだろう。

### 1-3 〈society〉を結ぶ——明六社およびアソシエーション<sup>ブラクティス</sup>実践

概念をめぐる研究は、多くの場合、言説の地平にとどまって行われる。日本における〈society〉概念の翻訳と「社会」という言葉の歴史についての先行研究もまた、もっぱら言説を対象として行われてきた。だが、「社会」という言葉の探究の作業にとって、それで十分だろうか。

チャールズ・テイラーは、〈近代〉を特有の「社会的想像（social imaginary）」の構成という観点から考察することを提案している。「社会的想像」とは「共同で行われるさまざ

13 『学問のすゝめ』十一編、『福沢論吉全集』第3巻、97頁。

14 たとえばトクヴィルは『アメリカのデモクラシー』において、sociétéにたいする警戒心を露わにしており、また J.S. ミルの『自由論』も、市民社会が「多数者の専制」に陥る傾向をもつことを指摘している。現在でも公的・政治的領域が経済的原理によって浸食され、生命の必要と経済的・物質的利益という価値へと人間の生が均質化される場として〈society〉を捉えるハンナ・アーレントの見方には、じゅうぶんな説得力がある。

まな実践 (practices) を可能にし、広く共有される正統性の感覚を可能にするような共通理解」——人々が社会生活を営むうえで、ごく当たり前のこととして互いに抱く期待や、自分が親しい人や他者と結ぶ関係についての想像力のあり方といったものであるとテイラーは説明している。<sup>15</sup>「社会」という概念は、まさに当該の言語-文化システムにおける新しい実践と「社会的想像」の編成に大きく関わるものである。実際、日本のケースを見ても、〈society〉概念との出会いは、観念上の出来事にとどまったわけではなく、〈society〉を現実<sup>プラクティス</sup>に生み出す実践へと——すなわち人間関係の新しい様式や社交実践の編成へと人々を誘う。われわれは〈society〉概念をめぐる人々が行ったことと、そうした行為を可能にし／そうした行為によって形づくられる「社会的想像」の分析へと向かう必要があるのである。

ここで取り上げることになるのは、明六社および、同時期に活発化するアソシエーション結成の実践である。明六社を嚆矢として、「社」を冠して結成されはじめた諸団体は、近世においては見られなかったような特徴をもつ人間関係様式の構築を試みることとなった。1873年に森有礼によって結成が呼びかけられ、翌年に正式に発足した明六社は、「ソサイチー (society)」<sup>16</sup>というものを日本でも実践してみようという自覚的な意識のもとで結成された最初の団体であった。これには、西周も福沢諭吉も参加している。明六社は従来、思想の場として、そこで論じられた思想-言説が主要な研究対象になってきたが、それがほかでもない「ソサイチー」として結成されたという構成原理の側面にも、もっと焦点が当てられてよい。

明六社は、ちょうど幕末維新期の日本人が西洋において驚嘆した「会社団結・社中」というもの、すなわち西洋近代的な自発的結社 (voluntary association) を日本において再現しようとする試みであった。その意味で、この「ソサイチー」は一般的・抽象的な意味のものではなく、具体的・直接的な意味の用法に属するものである。だが、この小規模な「ソサイチー」のなかで試みられた人間関係の実験は、同時に、より抽象的・一般的なものとしての〈society〉の構想にも関わる問題を提起する性質をもっていた。すなわち、互いに異なりあう対等な他者と交際し、差異を前提に共同的な生を営むためには、人と人とがどのように関係しあう場として〈society〉を構想したらいいのだろうか、という問題である。

明六社の試みは、この点で特筆すべき特徴をいくつも示している。明六社はまず活動の開始にあたって、かなりの力を注いで「明六社制規」を制定した。それは彼らが「ソサイ

15 C. Taylor, *Modern Social Imaginaries*. Duke University Press, 2004, p. 23. チャールズ・テイラー、上野成利訳『近代——想像された社会の系譜』岩波書店、2011年、32頁。

16 「かねて話しおき候書籍院の取り設け方、今来月にかけ出来いたるべし、ソサイチー二通り組み立て、一つは書籍院会社、一つは学、術、文社中なり、書籍之方は誰れにても入社出来申候、学術文社中は当時中村敬宇、福沢、津田、加藤、西、箕作、西村、杉、福羽、杉浦弘（是は未定）等凡そ十名にしてすでに集会五度もこれ有り、皆悦喜勉強なり、毎月朔と十六日両度に候」森有礼、鮫島尚信宛書簡、明治6年10月19日（傍点引用者）、『森有礼全集』第2巻、宣文堂書店、1972年。

チー」とそこでの人間関係がどうあるべきと考えたかを端的に示すルール＝法である。「ソサイチー」＝アソシエーションにおいては、自発的・自主的に自らを規定する法が定められ、それを遵守することをつうじて成員同士が関わっている。そしてそこに参加する成員は相互に平等と見なされ、平等性を前提とした運営方式（選挙や多数決など）が採用される。近世においても多くの集団は形成されていたが、こうした関係様式は新しいものであり、明六社以降、急速にこのようなアソシエーション実践は広まっていく。西洋の近代において自発的結社の活動は近代的社会関係の実験と学習に大きく寄与したが、明治初期の日本においても「ソサイチー」＝アソシエーション実践は、自律・自治、相互の平等・対等といった前提のもとづく新しい人間関係と社交のあり方を、初めて具体的なものとして人々に経験させ学習させるものだったのである。<sup>17</sup>

もうひとつ、明六社が提示することになったアソシエーション実践の特徴は、「ソサイチー」＝アソシエーションの重要な活動として、〈議論すること〉を位置づけていた点である。明六社以降現れた多くのアソシエーションにとって、議論することは主要な活動のひとつとなっていく。議論に際して明六社が配慮したのは、相互のあいだの意見の差異であった。議論とは異質な意見＝「異見」の交換であるということを前提に、差異があっても敵対せず、相互の差異を尊重しつつ対話し、交際するという関係性を明六社は意識的に作り上げようとした。彼らは「明六社制規」の第一条に明六社の「主旨」として、「同志集会して異見を交換し、知を広め識を明らかにするにあり」と明記する。志は同じであっても、意見には差異があることが、彼らの関係の前提であった。<sup>18</sup>このような関係性は、現在のわれわれにとっては自明のことと見えるかもしれないが（とはいえ、現在でもこうした関係を完璧なかたちで実現することは依然として困難でありつづけている）、この時代に先立つ幕末においては政治的意見の相違を暗殺によって解消するという実践が<sup>ブラクティス</sup>存在しており、明六社の社員の多くも、洋学者であることを理由に暗殺の危機にさらされた実体験をもっていた。彼らは明六社という「ソサイチー」の活動をつうじて、暗殺実践の横行を許容するような、そして異なる意見を対等に交わすことのできない圧倒的な不平等を当然のこととするような社会的想像から、新しい近代的な社会的想像への転換を目指していたのである。

しかしながら明六社の認識としては、彼らが目指し実現しようとしているような関係性のあり方が、当時の日本において、大きな規模、広い範囲で実現可能とは思われなかった。明六社は「ソサイチー」への正式な参加資格者をごく少数に抑制し、閉鎖性を保つこと

17 西洋におけるヴォランティア・アソシエーションの伝統のうち、〈法〉によってその成員が関係づけられるシヴィル・アソシエーションについては、マイケル・オークショットの考察を参考にした。Michael Oakeschott, *On Human Conduct*. Oxford University Press, 1975.

18 『明六雑誌』および明六社の社員たちは、この時期、繰り返し意見の差異を尊重し、致命的な敵対状況を相対化することを試みる論説を著している。たとえば、福沢諭吉「人の説を咎む可らざるの説」『民間雑誌』1874年6月、津田真道「本は一つにあらざる論」『明六雑誌』8号、1874年5月、西周「愛敵論」『明六雑誌』16号、1874年9月、阪谷素「尊異説」『明六雑誌』19号、1874年11月、西村茂樹「賊説」『明六雑誌』1875年4月など。

によって、彼らの議論内容の質だけではなく、関係性の質も確保しようとしたのである。もし、明六社による「ソサイチー」の実験がじゅうぶんに成功した暁には、それがより一般的な社会構成原理となる可能性が開けることとなろう。事実、明六社の結成とともに、日本では多くのアソシエーションが結成されはじめた。通常は明六社と合わせて考察されることの少ない、立志社をはじめとする草創期の民権結社が、実践構成のパターンにおいて明六社ときわめて似通っていることは、見逃されてはならない事実である。それらは明六社の構成原理を相当程度意識し、模倣していた。

以上のように、「社会」以前の状況の探究をつうじて、今では完全に忘却されてしまっている出来事にわれわれは気づかされることになる。19世紀後半の西洋世界との接触をつうじて、日本は一般的・抽象的な意味において〈society〉概念を受け止めたわけではなかった。重要な動機となったのは具体的な人間関係の様式にたいする関心であり、それを起点として civil な関係と civil society の現実化を試みる実践が立ち上げられたのである。

強調しておきたいのは、西洋近代の civil society の成立条件とされる資本主義経済の発展や宗教改革と所有権の確立を背景とした個人の析出といったような条件を、当時の日本が共有していたわけではなかったということである。しかしながら、このような諸条件を欠いた場所にも概念の輸入は起こりうるし、非西洋世界においてはそれは珍しい事態ではなかった。概念は、それぞれに固有のコンテキストのうちへと迎え入れられるとともに、さらにまた固有のコンテキストを生み出していくことにもなるのである。

## 2 「社会」が生まれる—— 1875年・コンテキストとしての公共圏

「社会」という翻訳語はいったいどのような場に生まれ出たのだろうか。それはどのようにして「相生養之道」や「人間交際」のような含蓄のある翻訳語を排除して、支配的な地位を占めることになったのか。〈society〉概念に「社会」という翻訳語が与えられ、定着していく過程を探究するためには、ちょうど同時期の日本において新聞・雑誌などの活字メディアが登場し、それが議論実践に重心を置くアソシエーション実践と連動することによって近代的な公共圏が生成しつつあったことを認識しておく必要がある。「社会」という言葉の初出は、新聞の論説記事のなかにおいてであり、しかもそれは新聞紙上の論争のなかでのことだった。こうして「社会」という言葉の意味とその変容にたいして、初期公共圏の構造が規定的な役割を果たすことになる。

この時期、新聞メディア公共圏は生成間もなかったにもかかわらず、急速に政治化しつつあり、きわめて活発な議論の応酬の場となっていた。さらにまたこの公共圏にはアソシエーション実践が密接に関わっており、定期刊行の活字メディアはアソシエーション=societyの動向の報道を熱心に行うとともに、アソシエーションにとっても活字メディアは重要な意見発表の機関であった。ちょうどこの時期の公共的言論活動は法的な空白期にあたり、相対的に自由度が高かったがゆえに罵言や誹謗中傷にみちた議論が闊技的に楽

しまれる傾向があった。「社会」という言葉の初出例は、こうした状況にたいするルール制定の必要性を打ち出すことによって、議論のヘゲモニーを握ろうとする意図から発されたものであった。

通説では「社会」という言葉の初出は、当時きわめて有力視されていた新聞記者、福地桜痴によって執筆された1875年1月の新聞の論説記事のなかである<sup>19</sup>。たしかにこの用例以後、「社会」という言葉は拡散しはじめるので、この用例をひとつの起点と捉えるのは妥当である。この福地による用例は、「社会」という言葉の性格を決定づけてもいる。すなわち「社会」という言葉は重厚な翻訳書や著作のなかで生まれたのではなく、当時最新のメディアであった新聞のなかで、しかも当時の新聞メディアを特徴づける論争のなかで生まれ、新聞メディアに適合的な用語のひとつとして広まっていったということである。この意味で「社会」という言葉はその誕生のときから、相当程度、日本の個別的なコンテクストに規定されていたし、また個別のコンテクストを作り出すものでもあったのである。

具体的には「社会」という言葉の初出とされているのは次のような文章の一節であった。

弁駁の論文は新聞紙上に多しと雖ども、昨日（一月十三日）日新真事誌に登録したる、文運開明昌代の幸民、安宅矯君が我新聞に記載したる本月六日の論説を批正せし論より期望を属したるはなし。吾曹はその全局の趣旨と全文の遺辞とを以て、此安宅君は必ず完全の教育を受け、高上なる社会に在る君子たるをトするを得るに付き、吾曹が浅見寡識を顧みず、再び鄙意を述べ、謹んで教えを請わんと欲す。唯冒頭の一節の如きは蓋し打過他<sup>ベルソナルアッタック</sup>的の議に係るより、吾曹は苟も世に公にするの新聞に於て、身上の実告<sup>ベルソナルプロテスト</sup>を成す可き自由を有せず。仮令い此自由を許さるるも、吾曹は勉強と経歴との援助を以て、漸く高上なる社会に加わらん事を祈望するに依り、昔日の粗鄙なる陋習を逐うて実告を為すを愧じ、又之を為すに忍びず。

この文章の意味は、現在のわれわれにとっては理解しやすいものではない。そのためこの初出用例の意味は、従来、十分に検討されてきたとはいえない。だが、日本語の「社会」がどのようにして生まれてきたかを明らかにしようとするなら、少し広い視点からこの文章が現れたコンテクストを復元してみる必要がある。

これは桜痴とある一般投書家とのあいだの論争的応酬のなかの一節である。当時の新聞メディアは、現在のそれとは大きく異なり、報道のためのメディアである以上に、一般投書家による投書活動が盛んな議論のためのメディアであった。政府による法的な規制もほとんど受けておらず、相当程度自由闊達な——その反面として罵詈雑言も飛び交う活発な議論が展開されていた。この時期は日本の近代史のなかでも、議論という実践にたいする期待と渴望がきわめて高まった時期であった。先にわれわれは、明六社をはじめとする「ソサイチー」＝アソシエーション実践が、議論する関係を活動の主眼に置いていたのを

19 『東京日日新聞』1875年1月14日。



見た。1874年の1月には政府にたいして「民撰議院」の設立を訴える建白書が提出され、議論が公的な意思形成・決定のための正当な制度であるという認識が広まった。同じ時期に存在感を増しつつあった新聞メディアも、自由な議論の場として日々全国各地から寄せられる多くの投書を掲載しつづけた。アソシエーション実践、新聞（さらに雑誌）メディア、政治的議論と議論実践の制度化は連動しあい、この時期、近代的な市民的公共圏の生成と認めるに値する状況が成立していたのである。

こうした状況のなかで現れた「高上なる社会」という言葉には、公共圏の議論の参加資格をめぐる、やや皮肉で排除的なニュアンスがある。このとき福地桜痴は、自分の書いた論説記事にたいして個人攻撃をとまなう批判を行った投書家にたいして、逆説的な表現を用いながら、彼が「社会」に属する資格をもっていないと批判しているのである。「社会」は、じゅうぶんな教養をもち、議論のルールをわきまえた、ともに議論するに値する人間だけが所属することのできる公共圏としての意味を帯びて、使われはじめた言葉であった。

ところで、このようなかたちで「社会」という言葉が使われはじめた公共圏の状況が、明六社「ソサイチー」に大きな影響を与えることになる。この時期の新聞メディアにおいて個人攻撃が横行し、罵言や誹謗中傷が飛び交っていたことは、投書家自身のあいだでもしばしば問題化されていた。明六社「ソサイチー」が「異見」の尊重を議論のルールとし、そのルールの承認を条件として入社資格を制限していたのにたいして、広く開放されている新聞メディア「社会」においては実際のところ、共有されるべき議論のルールが存在しておらず、その議論は公開の討議＝闘技としてのスペクタクル的な意味合いが強かった。福地の文章も示しているように、新聞メディアの議論にもルールが必要だという声は存在していたが、むしろ、無秩序状況にルールを与えようとする身振り自体、議論で優位を得ようとするアピールのひとつと化す傾向があった。その結果、政府にたいして言論規制を要望する言説すら現れたのだ<sup>20</sup>。このように、「ソサイチー」＝アソシエーション実践と新聞メディア「社会」においては、どちらも議論実践に重要性を与えながらも、のっとる原理は大きく異なっていたのである。

〈society〉概念をめぐるこうした二つの方向性の併存は、「社会」という言葉が現れたこの年、1875年の6月に新聞紙条例と讒謗律という二つの言論規制法が成立したことによって大きく変わることになる。すでに述べたように、「ソサイチー」＝アソシエーション実践の重要な特徴のひとつに、自らの手で自らの関係を規定するルール＝法を制定する自治の追求があることを指摘した。それは「ソサイチー」における議論もまた、参加者たちが相互に関係づけられているルール＝法以外の何物によっても規制されるべきではないということである。こうした「ソサイチー」の性格にとって、政府の制定した法律がどれほど破壊的なものであるかをもっとも敏感に察知したのは明六社に参加していた福沢諭吉

20 『東京日日新聞』論説、1874年8月29日、「上内務省書原稿の写」『日新真事誌』1874年11月12日。共存同衆による「置讒謗律議」（1875年1月19日）、「上讒謗律之草案表並草案」（1875年6月27日）、早稲田大学大学史編集所編『小野梓全集』第3巻、早稲田大学出版部、1980年。

21 だった。明六社は福沢の動議に応じて、議論の自治を喪失し政府に委ねる前に、公的な議論の活動からは身を引き、私的な交際場へと閉じこもった。こうして議論と関係性の自治をもっとも早く、もっともラディカルに追求した「ソサイチー」の活動は停止することになったのである。

こうした状況のなか、この年後半をつうじて新聞メディアの言説で「社会」の語が目につくようになっていく。ひとつには、政府権力との対立というかたちで公共圏の自意識が強化されていったことにより、次のような用例が目につくようになる。「新聞紙の流通するところの社会」(1875年7月28日、末松謙澄『東京日日』社説)、「民権の貴重すべきを主張するもの漸く我社会に蔓延するに至れり」(1875年9月10日、箕浦勝人『郵便報知』社説)。こうした用例は「社会」を公共圏と等置しているようにも読めるが、同時に官にたいする民の領域として「社会」をより広く捉えようとする姿勢が現れていることも認められる。すなわち、政府が法律によって規制しようとしているのは、直接的には新聞メディア公共圏の言説なのだが、ひいては広く人民全体から成る「社会」を抑圧しようとしているのだ、という意味づけである。このようにして、政治権力対社会という古典的な自由主義に見られる対立構造が、日本においてもようやく内実をともなって出現してくるのである。<sup>22</sup>

他方、「社会」という言葉が普及しはじめたとき、「上等社会」「芸妓社会」「醜汚社会」「文明社会」といった用例も増加していく。社会的階層や職種や身分ごとの部分社会を指す、実体性をともなった表現として「〇〇社会」を用いることは、こののち明治期をつうじて広く見られる用例であり、一般的・抽象的な概念としての用例よりも有力であったと感じられるものである。明治期においては、国民国家の全体が包摂されるような単一の包括的な集合のもとに各人が包摂されているという社会的想像よりも、貧富・階層・職業の異なる部分化された社会が数多く存在しているという社会的想像の方が根強いリアリティをもっていたであろうことが、この用例からは推測される。「社会」という言葉は、いったん成立すると、今度は〈society〉概念だけではなく〈class〉概念を引き寄せる力をもつことになったのである。<sup>24</sup>

このように、1875年は日本における〈society〉概念にとって重要な転換点となった年であった。この年、「社会」という翻訳語が現れ、公共圏の確立とともに拡散していった。「社会」という訳語が現れてから他の訳語を圧倒してドミナントになるまでは、わずか2-3

21 福沢諭吉「明六雑誌の出版を止るの議案」『郵便報知新聞』1875年9月4日。

22 この古典的自由主義的対立構造は、長きにわたって歴史研究の場では自然的で自明の構図と見なされていたが、こうした対立構造は歴史的なものとして検証されるべきだろう。

23 近年の国民国家論では、明治期は国民国家としての統合の時期と捉えられる傾向が強かったが、国民国家と表裏の関係にある「社会」の観点では、必ずしも統合の意識が前面化されていたわけではないことが感じられる。

24 事実、一時期まで「社会」は〈class〉概念にとっての有力な翻訳語でありつづけている。〈class〉概念の翻訳語として「階級」が安定したかたちで使われはじめるのは、20世紀への転換期における初期社会主義の展開においてである。石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』論創社、2003年。

年のことであった。このような急速な普及は、日本においてはこの言葉が何より新聞・雑誌メディア公共圏の用語として生まれたがゆえに可能なことであったと言ってもよい。しかしながらこうした急速な普及は、他方では「社会」というものについて内実ある定義を与える努力を欠いたまま、言葉が一挙に多用される状況が到来したことを意味している。実際、「社会」以前の翻訳語はそれ自体、強いコノテーションを帯びており、思想的にある程度厚みのある意味をとまなうものであったが、「社会」は意味の指示性が希薄な表現である。そのぶん、「社会」という翻訳語以後、この概念は具体性への密着から離れて一般化が進む。

とりわけ先にも挙げた「新聞紙の流通するところの社会」（1875年7月28日、末松謙澄『東京日日』社説）のような事例は、「社会」という言葉が、以前の翻訳語が帯びていた普遍的な理念性——他者と交わり差異を尊重し議論を主眼に置いた関係によってともに生きることを承認しあう——からは反転して、きわめてドメスティックな個別状況を指すための表現となったことをよく示している。それとともに、競合する翻訳語も速やかに消滅していった。「相生養之道」や「人間交際」を生み出した当の本人である西周や福沢諭吉も、間もなくこれらの翻訳語を放棄して「社会」という言葉へと切り替えていく。「相生養之道」や「人間交際」のヴィジョンはリアリティを失ってしまったのである。

### 3 「社会」以後

これ以後、「社会」という言葉は速やかに定着していくことになるが、その過程については紙幅の関係によりここで展開することはできない。だがその際、いかに新しい西洋思想と〈society〉概念にたいする発想が学習されようとも、引きつづき注視されるべきはそのような学習が行われる固有のコンテキストとそこでの経験であろう。こののち明治中期に至るまでのあいだで「社会」という言葉が領有されることになる言説－実践領域は、次のように概観される。すなわち、政府に対抗して人民による政治的な自己表出を求めようとした政治運動の賭け金として、また「社会」についての権威ある語りを独占しようとするアカデミズムにおいて、さらに「上層社会」へと組織されつつあった社会的上層部による「社会改良」の対象として、「社会」は領有されることになる。そしてこれらの動きに反発し対抗しようとする芸術的・美的価値の擁護者たちが「社会」的価値からの超越を標榜するに至って、明治期日本における「社会」概念の定着期はひとつのサイクルを閉じるように思われるのである。坪内逍遙の小説『当世書生気質』（1885-86年）の登場人物がもらす次のような嘆息こそ、「社会」にたいする若い世代の失望の端的な事例なのである。「社会へ出かけてから大いに悟った。社会は決して我が友じゃあない。ほとんど讐敵ともいべき程、我には薄情なもんだ……」<sup>25</sup>。

25 坪内逍遙『当世書生気質』第17回、岩波書店、1937年、227頁。

## おわりに

現在の日本語において、とりわけ学術の世界においては、普遍的な概念であることを前提して用いられることが多い「社会」という言葉であるが、ここまで見てきた明治期日本のケースが示すとおり、この概念がさまざまなローカルな言語－文化へと導入される過程は、むしろ〈近代〉の多様性を指し示すものであるように思われる。「社会」はこののち中国・朝鮮半島・ヴェトナムといった東アジアへと拡散していったが、それぞれで異なる軌跡を描いたはずである。ある言語にとって、ある概念が他の言語から翻訳的に輸入されたものであったとしても、その意味編成のプロセスまでが輸入されたものであるわけではない。意味編成は、必ず個別のコンテキストに従うことになる。こうした非-ヨーロッパ世界のさまざまな〈近代〉の「社会」概念の具体相を明らかにすることは、必ずや〈近代〉とは何かという問いを深めることにつながるだろう。「社会」のような基本概念においても、それを意味づけるコンテキストや経験は大きく異なっているという認識は、異なりあう言語－文化間における共通理解のありようについて、われわれを再考させるはずである。

もちろんローカルな言語－文化にとっても（この場合は近代の日本であるが）、この作業はそれぞれの「社会」概念を鍛えていくうえで不可欠である。「社会」は高度に専門的な学術的用法から、ごく通俗的な一般的な議論に至るまで幅広く用いられる言葉である。学術的・専門的な定義の洗練は、身体感覚と化した日常的でやや混乱してさえいる意味とはしばしば切断されている。だが、日常性の水準に根差した意味を取りこぼすなら、「社会」についての有意義な議論を行うことは困難になるだろう。そしてこのような日常的な意味こそ、固有の歴史的コンテキストによってもたらされたもののなのである。